

第十七課

あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っております

神であることと祈りと調和

「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。」

(ヨハネ一・四一、四二)

「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは……与える。」
(詩篇二・七、八)

新約聖書では、信仰と知識とが区別されています。「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、またある人には同じ御霊による信仰が与えられている。」子供や単純な気持のクリスチャンには、信仰はあっても知識がありません。子供のような単純さは、真理を受け入れるのに困難はないが、「神が言われたので」と言う以外、信仰の弁証をするようなことはありません。しかし、心を尽すだけでなく、思

いも尽して神を愛すること、神に仕えることだけでなく、成長して、神の知恵や、神の方法、ことば、わざなどの美しさを洞察することも神のみことろなのです。こうして初めて、信徒は神の恵みの栄光に完全に近づき、正しく賛美できるのです。またこうして初めて、私たちの心は、贖罪のうちにある知恵と知識の宝を知的に把握し、御座の前に上る賛美の最高の調べに、完全に自らを合せることができるのです。「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。」

この真理は、私たちの祈りの生活に完全にあてはめることができます。祈りと信仰は非常に単純なので、生れたばかりの回心者も力強く祈ることができます。しかし、真にキリスト教を研究すれば、祈りの教理の中に最も深い問題のいくつかがあることが分ります。祈りの力とは、どこまで真実なのでしょう。神は、どこまで、祈りにそのような力を許しておいになるのでしょうか。祈りのわざは、どこまで、神のみことろや摂理と調和するのでしょうか。神の主権と私たちの意志、神の自由と私たちの自由は、どのように調整できるのでしょうか。こうしたことは、クリスチャンの瞑想と研究の対象となる問題です。熱心に、うやうやしくそのような奥義に接近すればするほど、人の祈りにそれほどまでの力をお与えになる神を賛美し、御前にひれ伏さないわけにいかなくなります。

祈りに関して隠れた困難の一つは、表面に現れなくても、実際に祈りを妨げるものです。それ

は、神が完全で、御自身以外の何ものにも全く依存されないということから来ます。神は、無限の存在者ではないのでしょうか。神が神たることは、神御自身だけによることではないでしょうか。神は、お一人で決断される方ではないでしょうか。神の知恵と聖なるみこころが、存在するすべてのものを決定したのではないのでしょうか。祈りの答の約束は、私たちの弱さに対する思いやりにすぎないのではないのでしょうか。祈りの力——よく役に立つ力——について言われたことは、私たちの考えに合せるためではないのでしょうか。神はどういうわざにも決して依存されることのない方ではないのでしょうか。祈りの祝福というのは、祈りを実行することによってもたらされる影響にすぎないのではないのでしょうか。

このような疑問に対する答は、神の存在そのもの、すなわち三位一体の奥義の中にあることが分ります。神が一人格の方にすぎず、御自身に閉じこもる方だとしたら、神に近づく思いとか、神に影響を与えとかいった考えは成り立ちません。父なる神と子なる神は、聖霊なる神によって一致と交わりの生きたきずなを得ておいでになります。永遠の愛が御子を生み、御父が御子に、第二位格として、御自身に次ぐ同等の助言者としての地位をお与えになった時、神御自身の最も奥深い存在において、祈りとその影響力に対する道が開かれたのです。地上においても天上においても、御父と御子の関係は、与え、そして受ける関係です。受けることが、与えることと同様に、自主的、自己決定的なものであるならば、御子の側においては、求めること、受けることが

あるはずです。三位一体の聖なる交わりにおいては、この御子の求めが、神の三重の祝福を持ついのちの大きな働きの一つとなります。このことは詩篇の二篇に記されています。「きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは……与える。」御父は御子に、御父を動かす地位と力をお与えになりました。御子の求めは、見世物でもなく、名目だけのものでもありません。

それは、御父と御子が会い、お互いに満たし合ういのちの躍動であります。御父は、お一人で事を決すべきではないと決心されました。御子が求め、またそれを受けられることに従って決するようにされたのです。神の存在といのちそのものの中に、求めが存在します。地上の祈りは、その反映であり流出であります。イエスが、「あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました」と言われたのは、このことです。地上におけるイエスの御子としての存在が、天における御子としての存在と不可分であるように、この地上におけるイエスの祈りは、イエスの天における祈りの継続であります。人間キリスト・イエスの祈りは、御父のふところにおけるひとり子としての永遠の求めと、この地の人々の祈りとを結ぶものです。祈りの起源は、まさに、神の存在そのもののうちにあります。神のふところにあつては、祈りなしに、すなわち、御子が求め、御父が与えることなしには、何事も起らないのです。

このことは、人間の祈りが、御子によって、神に対してどんな影響を及ぼすかを理解するのに役立ちます。神の御命令は、御子の意見や願い、御子を通しての願いを無視した決定ではありません。

せん。主イエスは、初めに生れた方であり、すべてのものかしらであり、相続者であり、すべてのものは、主イエスによって、主イエスのために造られ、主イエスにあって成り立っているのです。御父の決定にあたって、御子は、全被造物の代表として、いつも發言權を持つておられます。永遠の御計画に関する御命令において、仲保者またとりなし手としての御子の自由と、御子にあって御父のもとに来る者たちの願いが受け入れられる余地がいつもあるのです。

御子が御父に働きかけるこの自由と力は、神の御命令の不変性と矛盾するという考えが起ったなら、取り消すことのできない過去に制限されているのは、神ではなく人間であることを思い起すべきです。神は、過去、未来という時間に生きておられるのではなく、永遠を住いとされるお方は、時間の区別に関係ありません。永遠はいつも現在で、過去は過去ではなく、未来はいつも現在です。人間の弱さに合せて、神は過去や未来をお語りになります。事実、神のみこころの不変性は、御自分の思うままをなさる神の自由と完全さと調和します。御子と民の祈りが、永遠の神のみこころに比べ表面的なものにすぎないとしたら、どうなるでしょうか。御父の心は開かれており、御子によってみもとに来る者の祈りをいつでも聞いてくださいます。神は、事実、祈りによってでなければならぬことを決定なさるのです。

神の主権と人間の自由のこの完全な調和と一致は、私たちには理解困難な奥義です。神は永遠の存在者で、私たちの考えのはるかに及ばない方だからです。しかし、御父と御子の永遠の交わ

りの中にこそ、祈りの起源と確かさがあり、御子と私たちとの交わりによって私たちの祈りが、恵み深い三位一体の神のうちなるいのちに影響を及ぼし得るということを確信して、慰められ、力づけられたいものです。神のみこころとは、人間の自由をむだにする鉄のわくのようなものではありません。神御自身が生きた愛であられ、人間としての御子において、あらゆる人間と最も親しい関係に入り、聖霊によって、あらゆる人間を神の愛の生活に入れてくださいます。そして、彼らのささげる祈りによって、神が統治される世界政治に関与させられるのです。

そのような光の中で見る時、恵みに満ちた三位一体の教理は、もはや抽象的な空論ではありません。それは、人間が神と交わりを持つことを可能にし、人間の祈りが神の地上支配の真の要因となる道を生き生きと示すものなのです。それによって私たちは、「キリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができる」というみことばの上に輝く永遠の世界からの光を、遠くからではありますが、つかむことができます。

永遠の神、三つにして一つなる聖き神よ。私は、深い敬虔な思いをもって、顔を隠して、聖なる存在者の奥義の前で、礼拝をおささげします。ああ、最も栄光に輝く神よ。その奥義を少しでも明らかにしてくださることを許されるなら、私は恐れおののいて御前にひれ伏します。なぜな

ら、私は御榮えについて黙想している時も罪を犯すことを恐れるからです。

父よ。あなたが御名をお持ちなのは、あなたが地上の子らの父であられるだけでなく、永遠の昔から、あなたのひとり子の父であられるからです。私はこのことを感謝します。あなたが、父として私たちの祈りを聞いてくださることを感謝します。それは、あなたが、永遠の昔から、御子の求めを考慮されて、みこころを決定しておられるからです。私たちは、この地上で、御子が天におられるあなたとなんという親しい交わりを持たれているかを見てまいりました。永遠の昔から、あなたの御計画や命令には、御子の祈りとそれに対する答の入る余地がありました。そして、何よりも天の御座におられる御子の真の人間性と、この地にある私たちの人間性のうちに働く聖霊によって道が開かれ、あらゆる人間の必要の叫びが取り上げられ、神のいのちと愛に触れ、どのような願いであっても、その答を与えられるのです。

恵み深い主よ。御子としてのあなたにあって、祈りの道は開かれており、あなたは祈りの保証をしてくださいます。ああ、どうか、あなたの民である私たちに祈りを教えてください。私たちのこの毎日が、あなたのように、子としての自覚を与えられ、御父がいつも私たちの祈りを聞いてくださると知るものとなりますように。アーメン。

「神は祈りを聞かれる」という、この祈りについての極めて単純な見解は、聖書全体から得たものです。それは、行為としての祈りと状態としての祈りの関係を豊かに示すものではあっても、祈りが私たちの心と生活に与える影響を強調するものではありません。それはむしろ、神からの祝福や賜物や救いを得る祈りの客観性とか、真の目的を明確に主張するものです。イエスは言われました。「求めなさい。そうすれば与えられます」と。

すべてを予見し、予定される神が、出来事、すなわち原因と結果のくさりの輪を予見し、また、実際の力として私たちの祈りを予見し予定するという考えがどれほど真実であり貴重であるとしても、それは、この偉大な主題の中で心が安らぎを得る光ではないと信じます。また、そこに、私たちが祈りに引きつける魅力的な力があるとも思いません。むしろ、そのような考えは、祈りの衝動や、いのちや、力をもたらす対象から注意をそらせるものだと思います。ただ、永遠にということではなく現在にもいます生ける神、あわれみ深い聖なるお方、たましいに御自身を啓示し、「わたしの顔を慕い求めよ」と言われる神、これが私たちを引きつける磁石であります。私たちの心と口を開かせるのはこれしかありません。

「神の御子イエス・キリストの中に問題の完全な解決があります。イエス・キリストは、この地上で、ただ単に人としてではなく、受肉した神の御子として祈られました。イエスの地上での祈りは、永遠の世界での祈りの現れにすぎません。永遠の世界において、イエスはキリストと定められました。永遠の昔から、神の御子は道であり仲保者であられました。私たちにはつたない表現しかできませんが、御子は、永遠の昔から、世のために御父に祈っておられたのです」(サフィア著『隠されたいのち』五章『主の祈り』参照)。